

## シチーリアにおけるゲーテ

——ゲーテと地中海世界——

そ の 三

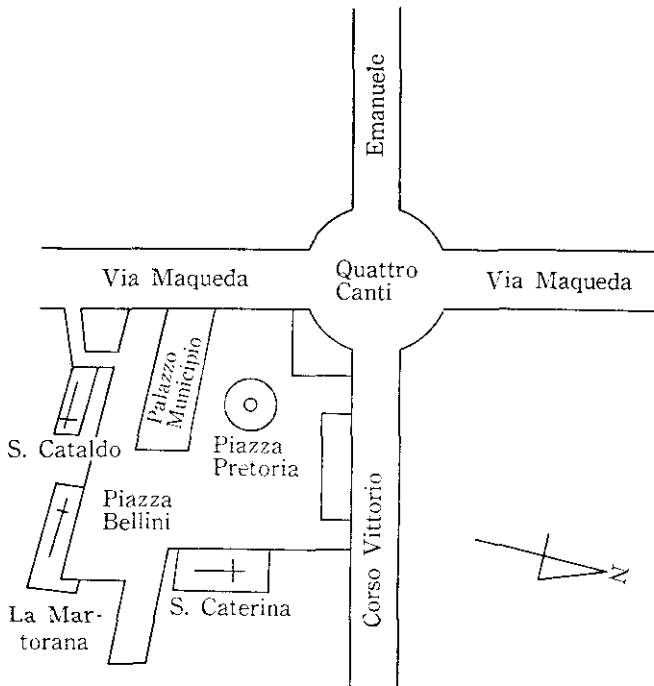
桂 芳 樹

### Siculo-Norman 建築と Goethe (承前)

#### 3. Martorana (S. Maria dell'Ammiraglio)<sup>1)</sup>

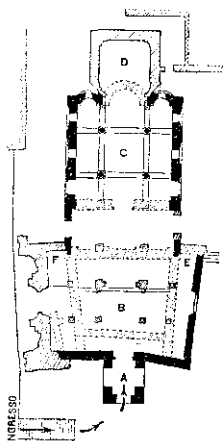
この建築は、Via Vittorio Emanuel と Via Maqueda が交錯し、Palermo における Baroque 建築の粋が集約された感じの、Quattro Canti の近傍にある。上記の二大道路によって区画される四つの街区のうち、東南側(海側)の区画には、Quattro Canti から Via Maqueda 沿いに二つの広場が設けられている。一つは、Quattro Canti に面した Piazza Pretoria であり、これには広場の中心に Baroque 式噴水の Fontana Pretoria と、広場に面して Baroque 式建築の S. Caterina 寺院と Palazzo del Municipio (以前の Palazzo Pretorio) が接している。もう一つは、Piazza Bellini であり、これも Via Maqueda に接し Piazza Pretoria とは Palazzo del Municipio を挟んで表裏の位置にある。La Martorana と S. Catoldo の二つの Norman 建築はこの広場に面している。(図版 I 参照) 従ってこの地域は、この都市の新旧二つの代表的な時代層が市街の景観に集約されている地域である。

この建物はシチーリア王国の建国を象徴する記念碑的建築である。それは Ruggero II 世が戴冠し、内外にシチーリア王国の独立を宣言したその年にシチーリアの最も著名な政治家により、それを記念して建てられた。その名称は、1143 年にこの建物が Ruggero II 世の寵臣で海軍提督の Giorgio d'Antiochia<sup>2)</sup> により建立され、さらに 1433 年 Aragon 王朝の Alfonso 王によって近くの僧院(1193 年に Elosia Martorana により創始されたもの)に寄進された因縁に因む。その後数世紀にわたり、増築と取壊しが繰り返えされ、原形がかなり損われた。その最大のものは、1588 年と 1683-86 年の改修で、当時



図版 I. Quattro Canti 詳図

のバロッキ的嗜好に沿った改築が行われたものである。最初の形態では、ギリシャ十字の教会の本体 (C) と、鐘楼 (A) との間に中庭と柱廊玄関があったが、1588 年の改修でこの接続部分がそっくり取毀され、教会本体 (C) のファサードもその際取除かれ、1600 年に現在見るような接続部分 (B) が連結され、教会本体と直結されて、その四本からなる二列の列柱の延長上に、それぞれ四本からなる二列の列柱が建てられ、(C)、(B) 全体として長方形の三身廊からなる教会に改造された。その際、北側 (Piazza Bellini 側) にバロッキ式の重厚な凹形のファサードがつけられた。さらに、1683-86 年の改築では、(C) の中央後陣が取払われ、代りに新たにバロッキ式の後陣 (礼拝堂) (D) が増築された。(図版 II で、黒色部分は Norman の遺構で原形を保っているもの、斜線部分は後世の改築により追加した部分、点線部分は、改築により追加した部分、点線部分は、改築により除去されもはや残っていない部分である)。

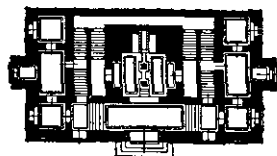


PALERMO-LA MARTORANA

図版 II.

壁面が厚く重厚な感じの正方形を底面とした直方体をなしておりその結晶体の構造が東方的特徴を示している。東側を除く三つの面にそれぞれ削りの深い、アーチの尖端が尖ったアラブ式の大きな窓がそれぞれ層の基底から開いている。第二層のアーチは下部から全体として二重アーチで、そのため重厚な感じを与えるが、窓は両開きで、白い大理石の細い円柱が窓の中央を仕切って立ち、その左右に仕切られた窓がさらにそれぞれ小アーチを構成し、それらの繊細な構造が、この層全体の重厚な印象を中和している。淡紅色の装飾壁の彫りの深い抽象模様、アーチを構成する珪石の深い幾何学的な模様などアラブ的な繊細華麗な特徴として注目に値する。

下二層の重厚さに対して、上の二層は、極めて華奢で、アラブ芸術の粋を尽した感がある。下二層よりやや小さい方形で、こんどは四壁にそれぞれ一つづつの開口部をもつ。その他に、方形の四隅はかなり大きな円柱になっており、それが左右の隣接の開口部のアーチと境を接している。この四隅の円柱はかなり複雑な構造になっている。円柱の下三分の二は、上三分の一に比べて一まわり周囲が細くなっている。そして、その下部の円柱を取巻くように3本の細い白い大理石の小円柱が立ち並び、上部の円柱を下から支える恰好になっている。三本の小円柱の上部は装飾の多い小アーチとなり、それが上部の太い円柱に接続する。また小円柱の柱頭には細かい装飾がみられる。そして、三本の小円柱の中央のものが、ちょうどその層の四隅に位置するように配列されているので

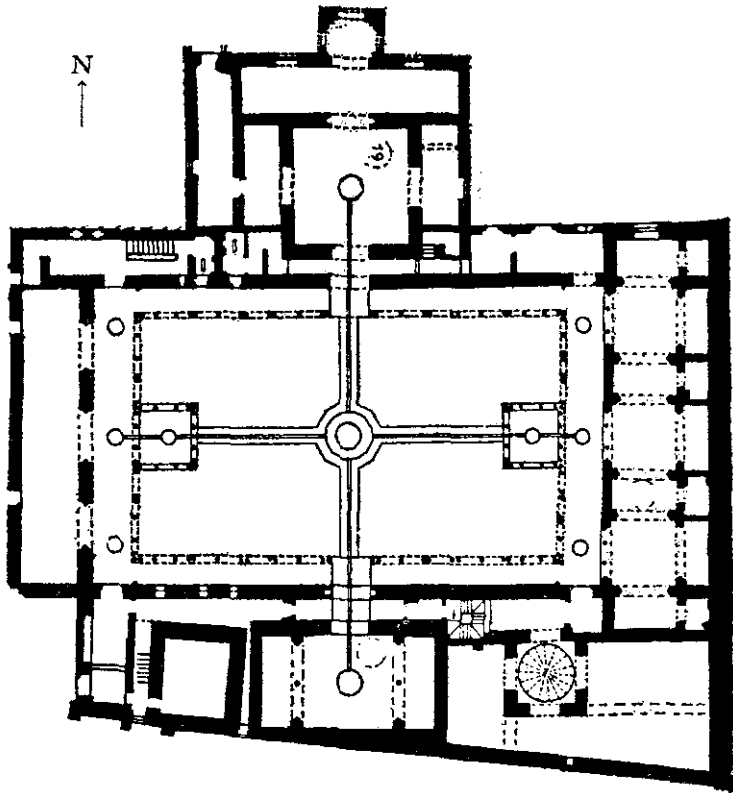


Palazzo della Zisa

図版 III. PALERMO

### A. 鐘 楼

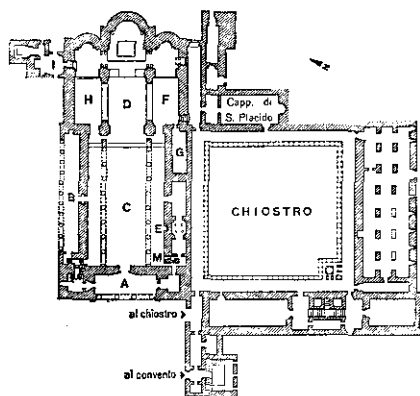
12世紀の建築。4層からなる。頂上にはドームがあったが1726年の地震で崩壊し現在はそのままの形である。そのほっそりした姿や、彫りの深い装飾から、全体としてガラス細工のような印象があり、Norman建築のなかで随一の繊細華麗な作品である。4層のうち下二層は



図版 IV. ALHAMBRA. PATIO DE LOS LEONES

ある。

同じような構造は、四壁の開口部についても言える。ここでは、下二層の場合とちがって、開口部のアーチは、下の方は壁面を刻んだものではなくて、白い大理石の小円柱が立ち、上部の珪石のアーチを支える構造になっている。さらに、この開口部の中央に3本目の小アーチが立って左右にわけ、大アーチの下部でやや奥の部分に装飾的な小アーチ二面を構成している。従って全体としてみると、これら二層では、24本の白い小円柱が林立し、大小12のアーチとともに重厚な上部の石の量塊を軽快に支えている優雅な感じが強調される。上部壁面の石の多色の嵌込み細工もアラブ的な華麗さを添えている。なお第三層と第四層とでは構造に多少のちがいがあり、後者は前者より高さがやや低くなり、



図版 V. MONREALE-IL DUOMO

平面積もやや小さくなる。しかし円柱とアーチの部分の比率が上部壁の部分に対して一そう大きくなり、そのため第四層では、いっそう腰高な感じになり、繊細な感じが最大限に強調されている。この鐘楼は東方的な官能美の極致と言うべきであり、これに匹敵するものは、Monreale の修道院の回廊の列柱と噴水、Alhambra 宮殿の Patio de los Leones の回廊の列柱とレースのような繊細なアーチ以外にはないであろう。

## B. 接続部

これは 16 世紀に増改築された部分であることは既に述べたが、この部分の新しいアーチには 17, 18 世紀にフレスコ画の壁画が描かれた。

(B) の部分で、Norman 時代以来の遺構は、かつて柱廊玄関の一部であった二面のモザイク壁画だけである。即ち、南側の「キリストにより加冠される Ruggero 王」(E)、北側の「聖母マリアの足許に跪く Giorgio di Antiochia」(F) である。(碑銘はギリシャ語で書いてある)。後者は破損が激しく後世の修復が行われたため、原形をとどめるのは、提督の頭部と両手のみである。また聖母は経巻をもち、そこにはギリシャ語による祈禱文が見られる。前者はシチーリア王国の建国の記念碑として有名であるが、キリストは威厳にみちた堂々たる姿であり、また一方加冠される瞬間の Ruggero 王は、周囲を伐り従え建国の意気揚がる北方からの侵入者という感じではなく、むしろ既にアラブ風の髯をのびし、ビザンツ風の basileus を着た、柔和な目をした地中海人という

表情をしている。これは東西世界の狭間におかれた、シチーリア王国の文化的高さと、その反面としての政治的な脆さを象徴しているとも考えられよう。

### C. 教会本体。

構造は既に述べたようにギリシャ十字で、その中心部（方陣 C）に円蓋を一つ載く。内陣は C と D との間の方形部分であり、通例によって C の部分との間は透かし彫りのある大理石の柵（transenna）によって仕切られている。二列の列柱は円柱でやや太く柱身は飾りが無い。（後世の延長部分の柱もそれに合わせてある。拱持はカーブが大きく、Cappella Palatina の場合のようなアラブ式尖りアーチではなく、上部のカーブが緩やかな樽形穹窿（volta a botte, barrel vault）で、アーチ壁が厚いので、それが円柱間を前後左右に延びる光景は一種の雄大な感じがある。従って拱腹面（アーチのカーブ内壁 interdosso）が広く、その部分に様々な聖像イコンが刻み込まれている。また天蓋部分は Cappella Palatina の場合と同様、鼓胴式で八角形の鼓胴部分と Pendentive を備える。内部装飾については、これも Cappella Palatina と同様、下部は大理石の単純な幾何学的模様で、上部（柱頭から上）がモザイクの装飾である。また、床は幾何学的な模様の大理石、特に（C）部分の床はモザイクと大理石との多色の嵌込み細工である。

モザイク壁面装飾（ciclo musivo）の配列は次のようになる。

1. 円蓋の頂点：王座に坐して祝福を垂れる Pantocratore（すべてを統べる者）。それを取巻く円環部にギリシャ語の碑銘がある。  
その周辺部：4人の大天使、ラファエーレ、ミカエル、ガブリエール、ウリエーレの横隊像。
2. 鼓胴部（正八角形。四つの明り窓がつく）：  
八角形の各頂点に一人ずつ8人の預言者たち。ダビデ、ソロモン、ザッカリア、洗礼者ヨハネなど。
3. Pendentive（球面三角形の接続部分）の壁龕部（八角形の8面のうち4面には明り窓があり、残り4面が壁龕となる。これは Pendentive の基底に相当する正方形の台座の四隅の上に位置する）：  
福音書著者4名（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）の像。この壁龕の上部にある小アーチに各人の名前がギリシャ語で記入してある。
4. 方陣（C）辺縁部のアーチ内壁（いわゆる mistilineo の部分）：受胎告知・

マリアの奉獻。

5. 方陣と内陣との境界のアーチの拱腹面：二人の大天使。
6. 方陣 (C) の北側側翼 (一般的には *Diaconico* に相当する) の天井の櫛形アーチ壁並びに方陣 (C) の南側側翼 (一般的には *Pròtesi* に相当する) の天井の櫛形アーチ壁：8使徒の大きな像。  
北側側翼の側壁：二人の天使  
南側側翼の側壁：消失
7. 両翼後陣壁：聖アンナと聖ジョアッキーノ像
8. 中央身廊で方陣 (C) の西側に隣接する部分の天井の櫛形アーチ壁面：キリストの誕生とマリアの昇天。

#### D. 中央後陣

既に述べたように、1683-86年に教会本体にもとから備わっていた旧後陣をうち壊し、増設した部分である。そのため、本来 (C) 部分にあるべき内陣が (C) より一つ東側に移動した。新しい後陣は、バロック式であり、床は美しいモザイク、壁面は色大理石の寄木細工とフレスコ画で飾られ、正面上部の青金石の美しい聖像壁龕には16世紀の画家 *Vecenzo da Pavia* による受胎告知の壁画が描かれている。

以上のような建築の構造から、この建物の特徴として次のようなことが考えられよう。

まづ鐘楼は構造から装飾の細部にいたるまで典型的なアラブ的な特徴をもっていることは既に述べた。教会については、アーチや壁面装飾 (鐘乳石様下垂天井など) などの点からみて、*Cappella Palatina* に比べてアラブ的色彩は希薄であるといえよう。ただ外観を考えた場合、教会の本来の形であったドームと正四角形の結晶構造はまさしくアラブの特徴であり、また内部装飾では、壁面下部に時折みられる幾何学的・抽象的な模様もアラブ的影響が考えられる。ただ全体の構造としては、典型的なビザンツ的な集中方式であり、*Cappella Palatina* の場合と同様、厳密にビザンツの正統的規範に従っていることがわかる。モザイク壁画の配置の順序についても、主要部分、とくに1から4までは内容、配列ともに完全に一致していることに注目すべきである。ただ、*Cappella palatina* にみられた中央後陣の「祝福を与えるキリスト半身像」(A-5) がみられないが、これはこの部分が *Martorana* では破壊され改築されたためであり、当

然最初の形ではこの壁画がこの位置にあったことが想定される。また、*Cappella Palatina* に見られた旧約聖書の各場面 (A-6 から B, C まで) が、ここではみられないのは、建物の構造の相違にもとづくものである。いづれにしても、聖像画の形式やモザイクの配列からみて、ビザンツの最も正統的な規範に依拠していること、また表現のスタイルも、画工のそれぞれの個性の相違にもかかわらず、ビザンツの最も純粋な伝統を受継いで威厳のある正統的なものであることなどから、この寺院のモザイクは *Cefalù* の *Duomo* のものとともに *Cappella Palatina* のモザイク (特に A の部分) と並行するか、僅かに後続するシチーリアのモザイクの第一の時期のものとして推定され、その時期のシチーリアにおけるビザンツ芸術の共通のスタイルをもっている。なおモザイクは全体的にみて金色を主体としているが、特に天蓋部分は光沢を帯び金色燦然たるものである。(因みに、この寺院は、いわゆる「シチーリアの晩禱」の事件 (1282 年) の際、シチーリア国民会議が開かれ *Pietro d'Aragone* が国王に推戴された縁りの地である。)

さて *Goethe* がこの寺院を訪れたか否かについては、既述のように 4 月 5 日 *Piazza Pretoria* を訪れた際、周辺の寺院を見学したという記事があり、どの寺院を訪れたかについて具体的な記述はないので断定はできないが、訪問の可能性は残されている。

#### 4. *La Zisa*<sup>8)</sup>

*Norman* の諸王は、*Palermo* 西郊から西南郊にかけて広大な庭園を設け、その中に宮殿、四阿、噴水、生け簀などをいたるところに、アラブ人の工匠に建造せしめた。それは、かつてアラブの詩人が歌ったと伝えられるように、美女の首を飾る真珠の首飾にも比すべきものであった。*la Zisa* は *la Cuba*, *la Cubula*, *la Cuba soprana*, *il Castello della Favara* などと並んで、当時の遺構の一つである。

この建築は、*Guglielmo I* 世 (在位 1154-66) により着手され、息子の *Guglielmo II* 世 (在位 1166-89) により完成された。*la Zisa* はアラビア語の *el-'aziz* に由来し、壮麗とか光輝の意をあらわす。*Corso Vittorio Emanuele* を *Porta Nuova* の外へ出たところで、斜右に向って入る *Via Colonna Rotta* という道があり、そこを進むとやがて東方向 (*Porta d'Ossuna* 方向) から *Corso Vittorio Emanuele* とほぼ平行して走って来る *Via d'Ossuna* という道路と



交差する。その交差点 (Piazza Ignastone という) を渡ってしばらくして左に入る道があり、それが Via Zisa である。それを直進するとやがて露地の奥に門がみえる。露地は左手になお続くが、この門を通して内部に入り右に回ると、Piazza Zisa が現われる。この広場に面して、正面を東側に向けて立っているのが、la Zisa である。このあたりになると標高が上ってくるので、ここからは Palermo の市街を見渡すことができる。

建物の外部構造はアラブ式の結晶構造で、長方形で三層からなり、短い方の壁面中央には、下から上まで正方形の櫓が付き、頂上は屋根となつて、この建物の外壁の密封された単調な印象に変化を与えている。代赭色の壁面はアラブ建築の規範に従って、ほとんど装飾がなく、わづかに各層ごとにひらかれている幾つかの窓と、その上部に大きく弧を描いている盲迫持、ならびに屋上の城壁部分にみられる銃眼形の縁飾りなどがみられるだけである。正面(東面)は、第一層には中央とその左右に大きなアーチ状の出入口が並ぶ。中央口はその上の第二層にかけて盲迫持が大きな弧を描いて延び、そのアーチのさらに上方、第二層と第三層との間には、かつてアラビア語の銘があったが、現在は 16 世紀の胸壁にとり替えられている。

内部構造は平面図(図版 III)に見るごとく、相当複雑である。外観は三層であるが内部は二層で、一階は天井が高い構造になっている。一階は、いわゆる esedra (希=ἑξέδρα, 羅=exedra) 形式で、左右と背後は閉され、正面のみが広く外部に開放されて吹きぬけになっている構造である。まづ一階中央部の奥にこの建物の中心部である広間があり、それと正面入口との間に広い歩廊(左右両出入口まで拡がる)があつてこれらを連結する。広間の左右にはさらにいくつかの小広間が対称に配置されるという構造である。

正面入口のアーチは元来、四本の円柱に支えられたアラブ式尖アーチだったが、後にこのアーチの部分が取りかえられ、バロック式の低いアーチとなつた。このアーチの内壁にこの地の風光を讃えた古代アラビア語の漆喰の讃が嵌め込まれている。

広間は正方形の構造で、入口を除いた三壁面にそれぞれ壁龕<sup>アルコーヴ</sup>がついている。左右は長方形で奥のものは方形である。室内の上半分と下半分とでは素材がちがひ、上半は粗い溶岩、下半は光沢のある大理石の鏡板で、様々な装飾板が緻密な構造で嵌め込まれている。三個所にある壁龕<sup>アルコーヴ</sup>の天井部分は、ちょうど三角錐の頂点部分のよう漸縮形になっており、しかもこれがすべて、アラブ式鐘乳石状下垂天井の形をなしている。この部分が、先に述べた室内壁面上半分に三

角形状にくい込んだ形になっている。この鐘乳石状穹窿の基底部分の直下の部分に、それぞれの壁龕<sup>アルコーブ</sup>においてその奥の壁面の間口いっぱいにはモザイクの裝飾壁が横に走っている。その中で特に中央壁龕<sup>アルコーブ</sup>のものは三つの環状のモザイク模様が横に並んでいる。このうち両端のものは棕櫚を中央に挟んで相対する二羽の孔雀の図柄、中央のものはやはり一本の樹木を中央に挟んで弓をひきしぼって相対する二人の獵人の図柄である。このモザイク裝飾の図柄と金地を主体とする色彩は、Palazzo dei Normanni の Sale di Re Ruggero のモザイク裝飾を強く想起させるであろう。(実際に Zisa のモザイクは、第 III 期に属し、Cappella Palatina の (C) 部分、Sala di Re Ruggero のそれと同時代に属する。それは時期的には Guglielmo II 世時代になる)。壁龕部以外の室内の壁面では、この高さの部位は、モザイク裝飾が続いているわけではなく、上部壁面の煉瓦のように粗い壁面がそのまま連続している。ただ、壁龕部のモザイク壁画の一番下の縁の部分から、帯状に連続して幾何学的なモザイク裝飾の細い帯が伸び出し壁龕部の左右壁から外へでて、室内壁を一周する。これが室内の壁面の上下を区切る境界とみることができよう。これから下は大理石の嵌板が幾何学的な構成をとって上下二段に嵌め込まれている。壁龕の左右両壁と、室壁の接する部分である稜のところに、ちょうど上記の細いモザイク裝飾帯を支えるようにそれぞれ一對の円柱が嵌め込んであって、その柱頭には鳥の彫刻がある。さらに、この部屋の特徴には水の装置が挙げられる。中央壁龕では奥のモザイク裝飾板の下、上部の鏡板の中央よりやや下のところにある穴から水が湧出し、それが壁面を伝って流れ、やがて下の鏡板の上部から前方の床にむかって斜に立てかけてある凹凸の激しい大理石盤の上を滑りおち(図版 III 参照)、広間を奥から入口に向かって縦走している溝に注ぎこむ。この溝を通り、水は部屋の中央二箇所にある大きな水盤を順次潤して広間の入口付近で大理石の床の一角に姿を消すという構造になっている。また壁龕の水の湧水口の部分は実際はまた小さな壁龕を構成して、湧出口の上の方にはそれを掩うように小壁龕の皇帝の鷲の模様の小アーチがついている。なお、広間の壁面は 16 世紀のフレスコ画などでかなり汚されているが、これはこの建物が今世紀初頭まで個人の所有となっていて、建物全体に相当な改変が加えられたためである。現在シチーリア州政府の手で復元がすすめられている。

以上に述べたのが一階の大体の構造であるが、二階にもこれと類似した構造の広間がある。

また、広間の水道はかつては、その延長線上の方向に延びていて、建物の正

面の一地点にあった水槽にその水を注いでいたと言われている。この水槽はイスラム教で特別な宗教的意味をもつ「泉亭」*hauz* であつたと思われる。

さて、以上のような *la Zisa* の建築の細部を検討すると、次の二点の特色が浮んで来よう。

その第一は、この建物がアラブ式の結晶構造をとりながら、*esedra* の形式を採っていることである。*esedra*<sup>4)</sup> はギリシヤ・ローマ時代以来の伝統を有する建築様式で、貴族の館などで *atrium* (*atrio*) (多くの場合住宅や神殿の中心部にあり、家庭生活や祭祀の中核としての機能を有する広間。部屋の中に円柱に囲まれた内庭を抱え、その部分は上部に屋根がない) に隣接している部屋である。それは *atrium* の左右側面に隣接することもあるが、多くの場合その前面(正面玄関側)と境を接し、その控えの間の役目を果す。この *esedra* は、*atrium* と接する一方、反対側、即ち建物の外縁側では *περίστυρον* (*peristylum*) (建物を取巻く周柱式回廊)と境を接する。*esedra* は、他の三面は完全に壁面や扉で支切られているが、*περίστυρον* との境界は壁面や扉がなく円柱があるだけで完全に吹きぬけになっているため採光と風通しがよく、そのため夏の暑い時期の休息に適し、また通常木製や移動式の椅子が備えつけられているので、談話や団欒やあるいは瞑想にふさわしい部屋である。(また床にモザイク装飾、壁面に絵画などの装飾が多く、*Pompei* 発掘の個人住宅の遺跡にみられるのは多くこの形である)。*la Zisa* の広間も、このギリシヤ・ローマ以来の伝統的な *esedra* の形式に則っており、それ故にこの建築形式の機能——日常的な次元をこえた、美と沈黙と逸樂的な休息の場としての機能——を体現しているということができよう。

次に *la Zisa* の建物の第二の特色をあらわすものは水である。

*la Zisa* の泉水の構造をみてすぐに思い浮ぶのは *Alhambra* 宮殿の *Patio de los Leones* (図版 IV) の泉水である。

*Patio de los Leones*<sup>5)</sup> はいわゆる *hortus conclusus* で、四壁を建物で塞がれている。それらの建物は北側が *Sala de las Dos Hermanas*, 南側が *Sala de los Abencerrajes*, 東側が *Sala de los Reyes*, 西側が *Sala de estalacititas* である。この *hortus conclusus* という構造自体が、イスラム建築では「秘苑」を表わし、天国<sup>6)</sup>のイメージをもつが、*Patio de los Leones* のこの宗教的な象徴性を最も端的に表わしているのはその泉水である。東西が

28.5 米、南北が 15.7 米あるこの内庭の中心部には、この内庭の呼称が由来する 12 頭の黒大理石の獅子によって支えられた水盤があり、その獅子の口から水を噴射している。この 12 頭の獅子は黄道十二帯のそれぞれの位置の 12 の太陽を象徴し、獅子の口から噴射する水は「永遠の生命」を、獅子が支える水盤は天上の水を湛える「海」を表わす。この象徴的な 12 頭の獅子に支えられた泉水の構造は、様々な連関を介して、遙かにキリスト教以前のオリエントから Alhambra に伝えられたものである。さらにこの「獅子の噴水」に対しては、内庭の四つの方角から四本の水路が収斂する形になっている。即ち、上記の東西南北の四方向にある四つの広間の内部の床にはそれぞれ水槽があり、そこから泉水が湧出し、広間の位置が「獅子の噴水」より高い所にあるために、溢れた水は水路を伝って「獅子の噴水」の台座の周辺に集中し、やがてそこから地底に吸い込まれる。この四本の水路がまた、「天上の国」においてその四つの主要地点から中心に向かって流入する四本の川という、イスラム教の宗教的な象徴を形づくっているのである。この水路は、それぞれ四つの広間前床にある水槽に源を発するが、Sala de las Dos Hermanas (北) と Sale de los Abencerrajes (南) とでは庭に面した回廊の奥にある広間の中央のかなり深いところから発しているのに注目すべきであろう。これらの広間は、esedra の形式に近く、特に南側の Sala de los Abencerrajes は完全な形を示していて、その点で la Zisa との類縁が指摘されよう。またこれらの広間は天蓋部分に壮麗な蜂窩状装飾 (panales) をもち (この天蓋は Alhambra 最大のもの。なお、Alhambra では天蓋の外郭の丸屋根は露出しておらず、いずれも外側から日本家屋のに似た破風式の屋根がすっぽり覆っている)、また la Zisa より遙かに大規模な壁龕とそれを覆う鐘乳石状下垂アーチ (estalacititas) があり、この点でも la Zisa との類似が指摘できる。一方これに対して、Sala de los Reyes (東) と Sala de estalacititas (西) とでは、回廊の外側にさらに中庭に突出した方形の柱廊玄関がある。これは、繊細な円柱の上にレースのような鐘乳石状下垂アーチがかかり、Alhambra では Patio de los Arrayanes と並んで最も幻想的な美しさを誇る場所であるが、これもコーランに述べられた「天上の国」にかかる軽やかに浮遊する天蓋のイメージの象徴化であり、遙かにオリエントやペルシャの建築の系譜をひくものである。泉水の源は南北の建物の場合とちがって、ここでは広間の内部ではなくて、回廊の部分に発し、さらに柱廊玄関の床の水槽をへて中庭の水路に流入する形になっている。また南北の建物の場合ほど大規模ではないが、この東西の広間でも天蓋部分に蜂窩状装飾がみ

られる。

以上のように、Patio de los Leones では Patio の泉水の組織を中心にして、イスラム教の教義が具象化されているのを見たが、その他の部分でも建築の細部に宗教的意義が、それぞれ賦与されており、Alhambra の建築全体がイスラムの宗教的イメージを統一的に体現した建物であることがわかる。イスラム建築においても、ビザンツ建築の場合と同様に円蓋の内部は宇宙論的な構成をとっており、天蓋の頂点は絶えざる転回運動をつづける天空を象徴する。それに対立するものとして、天蓋の下方の土台の壁の部分は地上の生活を象徴する部分となる。天はエーテルからなり、それを象徴する蜂窩状装飾(panales)は Alhambra では極度に細分化し、様々な凹凸をもつ小房に分解してそれらの稜線を複雑化して、それによって光を捕捉し、全体として天蓋を非物質化し天空のエーテルのもつ流動的なイメージを現出させようとしている。またイスラム建築の鼓胴部分には、その Pendentive の部分に鐘乳石状下垂装飾 (estalacititas アラビア語では muqarnas) があるが、この部分は天上の生活と地上の生活を接続する移行部分に当り、この部分の鐘乳石状装飾は天空の流動的なエーテルが地上の世界に下って次第に凝固する姿を形象化したものと言われていゝる。この点は先に述べた Sala de los Reyes と Sala de estalacititas の方形の柱廊玄関の装飾も同様で、花や星の繊細な透かし彫りのある壁面は素材の材質をわすれて、さながら光の結晶のような透明な印象を与え、天上の世界の地上における示顕を象徴していると言えよう。

以上に述べたことから、Alhambra の建築は、次のように要約できるであろう。この建物がイスラム教の天国の象徴として、一方に豊かな水や鳥の囀り、草花の芳香(現在この内庭は砂が敷きつめてあるが、かつては植物が繁茂していた)などの生の充溢があり、他方に永遠の精神性を現わすものとして結晶化した光の世界があり、その二つを併せもつ理想の世界として構築されていること、そして一方で建築の固い素材を光の波動にかえ、他方で光を不動の結晶にかえ、物質を精神に昇華しまた精神を物質に変換する場として構築されていること——である。これが Alhambra の建築「光の錬金術」と呼ばれる所以である。それ故に、世俗的な建築であるが——イスラム教では世俗建築も宗教建築も、宗教的機能では余りちがいが無い——Alhambra の宮殿は、宗教的な観照により人間精神の回復を目的とする理想の場として構築された、イスラムの精神文化の精華と呼ぶことができよう。

la Zisa の建築もこのような、系譜において考えることができる。

la Zisa と Alhambra に共通するものは多い。壁画装飾のアラベスク模様、天蓋の蜂窩状装飾、鐘乳石状下垂装飾や天井、入口に柱廊を控えた *esedra* の構造、そして現在「獅子の噴水」こそないが広間の奥から湧出して室内の二つの水槽を潤して、かつては正面広場の噴水に流入していたと想定される泉水の存在などである。これらのことから、la Zisa の建築は、生と精神、豊饒と単純の二元性を主軸とするイスラム教の精神の脈絡において把握することが必要であろう。ただ Alhambra においては、時代が下るために (XIII-XIV 世紀) 頽廢に近いまでに極端に洗練されているのに対して、Cappella Palatina や la Zisa あるいは Monreale などでは、創造期の粗野な力が息づいているという違いが感じられる。おそらく、Alhambra の場合は北アフリカのアラブ回教圏を通じて、そして la Zisa の場合はシチーリア対岸のアフリカ回教圏、あるいはビザンツ文明圏を仲介として、古代東方起源の宗教思想が流入したものであろう。

la Zisa の泉水は、Alhambra のそれと同じく生の豊饒を象徴する。後者のように、黄道十二帯の太陽を象徴する 12 頭の獅子も、海を象徴する水盤も、四隅から流入する天国の河川を象徴する四本の水路もなく、完全な神学的な体系とはなっていないが、la Zisa はこの泉水を核心として、地上的で同時に天上的な、逸樂的で同時に精神的な異教の「秘園」としての機能を表現している。la Zisa の場合も Alhambra の場合と同様、建築家がどれだけその宗教的意味を理解していたかは不明であるが、無意識的にもせよ、そのような性質の建築として宗教的なイメージがその雰囲気の中に現われていることは否定できないであろう。因みに、la Zisa 以外にも、この Palermo 西郊の広汎な宮苑には池亭や水を繞らした四阿があり、また湖や池や泉なども散在したが、今はいずれも姿を消し、わずかに Cuba や Cubula などの建物が残るだけであり、それらもその周辺に繞らしていた川や池などがことごとく姿を消してしまったと言われる。

なお、Goethe と la Zisa の接触について述べると、Goethe は la Zisa について、「イタリア紀行」の 1787 年 4 月 16 日の項<sup>7)</sup> で次のように述べている。

—そこでは実際、回教系の、いままでよく保存された家屋が我々の目を嬉しませてくれた。—高くはないがゆったりして美しく均衡がとれた部屋がいくつもある。北方

の気候ではちょっと住めないだろうが、南方の風土ではひどく気持のよい棲家だ。建築の専門家に聞けば、この建物の平面図と立面図を手に入れることができるかも知れない。

Goethe のこの批評は、他の建築に対する感想と考え合わせると、かなり好意的なものを見てよいだろう。また相当深い関心を示したことが窺える。イスラム教の教義的背景は別としても、地上における天上の国の実現としての「秘園」としてのこの建物の性格を直感的に感じとっていたことが行間からみることが出来る。Goethe において、東方世界に対する関心が具体的な形をとって来るのは、第二次ローマ滞在の時期にこの地に集って来る各種の情報に触れてからであるが<sup>8)</sup>、この体験は、十代から二十代にかけてコーランに関心をもち、後に「西東詩集」の時代にペルシャなど東方世界に対する関心を深めた Goethe が、東方世界に接触した最初の具体的な事件として記憶されるべき日である。

## 5. San Cataldo<sup>9)</sup>

この建物は Guglielmo I 世時代の海軍大臣 Majone di Bari<sup>10)</sup> によって 1160 年頃建立されたものである。従って年代的には la Zisa と同時代か、それよりは少し後のものと推定される。建物のある場所は、図版 I に見るように La Martorana のある Piazza Bellini の Via Maqueda 側であり、La Martorana の西側に隣接している。入口は Via Maqueda 側で、内陣が Martorana 側にある。

この建築は外形的には単純な平行六面体をしており、アラブ式の典型的な結晶構造で、立方体を三個連続して並べ、各立方体の上にそれぞれ鼓胴式<sup>ドーム</sup>の半円形の赤い小ドームをのせた形になっている。屋上の胸壁にはアラブ式の銃眼形の縁飾が刻まれ、簡素な壁面には立方体に一個ずつの割合で、下から上まで側壁いっぱい大きな盲迫持が刻み込まれ、その盲迫持の内部のいちばん上部に大きな窓がそれぞれ開き、そこにアラブ式の透彫りのある棧が嵌っている。正面のファサードは三部に分れ、上部に繊細な片開き窓をもつ。

内部は長方形 (10m×7m) の空間を 6 本の円柱によって 3 身廊に分け、その各々に後陣がつき、中央身廊上には 3 個の小ドームが連続してのっている構造である。

この建物の内部の特徴は、壁面がモザイク装飾を施されたことがなく、生のままの石材の材質がそのまま現われていて、ドームの内部構造やアーチの組合

せ具合などの東方的特徴がよく把握できる点にある。多少の時代の隔りを保ちながら、奇しくもその時代を代表する二人の海軍提督により寄進された双子の寺院——la Martorana と San Cataldo が、一方はシチーリアのモザイクの芸術の粋を集め、他方が装飾を最小限にとどめて簡素な形をとっているのは、際立った対照をなしているといえよう。

それぞれのドームを戴く三つの立方体は、介在するものがなく直接隣接しているので、ドームを頂く、アーチ上の方形の台座は、それぞれ隣接の台座と一辺を共有しており、その鼓胴部分ドームの一辺を、それぞれ隣接のものとも共有する形となっている。それ故、下から見上げると、6本の円柱に乗るアーチ、その上に乗る鼓胴部分の壁龕や盲窓、頂上の円蓋部などの曲線や直線の輻輳する光景はダイナミックで壮観である。そして、下からみるとアーチ上の方形の台座の四隅に鼓胴部分の壁龕が、ちょうど 45 度角で四隅を斜に切断するような形で来て、それによって、台座の正方形が鼓胴部では正八角形となり、さらにその正八角形の上にドームの円蓋が隙間なく乗っている構造がよく観察できる。壁龕の部分には鐘乳石状下垂装飾が本来ならば置かれるはずであり、このドームからアーチまでの構造は、まさしくイスラム建築の純正式の結晶構造であることがわかる。ただ、下部の空間は小規模ではあるが左右3本ずつの円柱で三身廊にわかれ、中央身廊にはそれぞれ3個のドームが乗っているが、左右側廊もそれぞれアーチを戴き独立した空間をなしている。その点でビザンツ式のドームバシリカの要素ももっており、ビザンツ、アラブの二つの要素が混淆していると考えられる。なお、アーチは曲率が大きく先端がやや尖ったアラブ式アーチで雄大な印象を与え、円柱の柱頭はそれぞれ異った彫刻が施されている。

室内装飾としては、モザイクがほとんど全面的に剝離している(例外として、床と祭壇の部分にだけモザイクが残っている)ことは既に述べたが、これが最初からその意図であったのか、あるいは Matteo Bonello のクーデターにより、施工者が殺害されたため途中から計画が放棄されたものか、いずれかは解らない。しかしいずれにしても、Piazza Bellini にある一対の寺院が、それぞれの時代を代表する政治家の手により建てられ、双方ともにその時代の政治的大事件を背景とし、一方は建国の理念を示すかの如く東西の芸術の粋を集めて華麗に、他方は不安定な政治情勢を反映するかの如く未完の形で終わっているのは、シチーリアの波瀾に富んだ歴史を象徴しているものといえよう。

なお Martorana の項で述べたように、Gothe はこの寺院を訪れたか否かは不明であるが、訪れたとすれば4月5日が可能性があるろう。



6. (a) Duomo di Monreale<sup>11)</sup>

Monreale は Palermo の西南 8 軒の地点にあり、Caputo 山 (670 米) の山麓で Conca d'Oro および Oreto 溪谷を見下す標高 300 米の台地の上に位置する。そこからは北東の方向に遙かに Palermo の市街と海を望遠することができる。Palermo から出発するときは Porta Nuova を出て、Conca d'Oro を一直線に横断する Corso Calatafimi を直進し(途中 la Cuba などの建物や、Conca d'Oro のオリーブ、柑橘類、無花果などの豊かに実った田園風景をみることができる)、la Rocca という小村に到着する。その辺りでそろそろ Conca d'Oro が尽きて、右手に山が迫って来るが、そこから Monreale までの登り坂をよい道路が続く。これが後に述べるように、Goethe が言及している道路で、Monreale 大司教 Testa が 1760 年頃敷設したもので、途中二箇所だけ昇り坂の所で曲折する箇所があるがあとは直線である。この二箇所の曲角に、Goethe が言及している噴水があり、第一のものが fontana del Pescatore、第二のものが fontana del Drago で、ともに Ignazio Marabitti<sup>12)</sup> の作品である。坂を昇ったあとも道路は登り勾配で、右手には道路沿いに小村落が散在し、その背後には Caputo 山系の 600-700 米級の山々が迫り、左側には数本の支流を含めた Oreto 川の溪谷に柑橘類などの果樹園が見渡す限り拡っている。道路は Monreale の市街に入ると三本のちいさい道に分岐し、そして市街を通過したあとで再び一本の大きな道路となって合流する。市内の 3 本の道路のうち真中の道路が市内に入って間もなく、除々に左側(南側)に曲り始め、やがてそれが市の中心の広場に入り込む。その広場は現在 Piazza Vittorio Emanuele と呼ばれ小庭園と大理石の小噴水、fontana del Tritone を備えているが、この広場の南側(大体の方向)にその側面をみせて立っているのが Monreale の Duomo である。従って図版 V で見ると、Duomo の左側面にある柱廊玄関 (B) が開いている対面が上記の広場であり、道路は図の左側上方からこの広場に走りこんで来る形となる。また Duomo の正面玄関 (A) の向いの空間はこれも広場で Piazza Guglielmo II Normanno と呼ばれる。そして Chiostrro の右側の建物の外は、既に Oreto 溪谷への傾斜が始まっており、あたりは一面の樹林と畑である。その遙か下を la Rocca から Partinico (Monreale より先にある町) への迂回道路が走っている。従ってこの教会は Monreale の町の南端にあるということが出来よう。

この寺院は Norman 王朝の事実上の最後の王 Guglielmo II 世によって、

1174年から数年のうちにはいわば一気呵成に建てられた。Chiostroの方はそれよりやや遅れてこの世紀いっぱいにかかったといわれる。それ故にこの種の建築としては後世の追加や修復は余りなく、比較的純粋に原形のままの姿を留めている。しかし Ruggero II 世以来の西方と東方との融合の理想の実現として、Norman 芸術の技術と経験を集約して、アラブ=ビザンツ=ロマネスクの当時の地中海世界の芸術の理想の集大成として一挙に築かれたこの建物は、Norman 諸王の夢みた地中海王国の理想の最後の芸術的達成として、同時に Norman 時代の終焉を示す挽歌ともなっていて、既にそれ以前の Norman 建築とは異った兆候をみせている。

それが端的に現われているのがまず全体の構造である。この Duomo の構造は、102m×40m の3身廊と3後陣を備えた古典的なバシリカ方式であり、イタリア中部の Campania 地方などのロマネスクの系譜を引くものである。ドームは既に存在しない。ただ (D) の部分(ギリシヤ十字における crociera の部分。この建物ではこれが内陣となっている)が四周を厚いアーチ壁で囲まれた方形になっているが、これはビザンツ式集中方式(ただしドームがない)の影響と考えることができよう。

外観について言えば、まず正面は Piazza Guglielmo II Normanno に面しているが、正面ファサードの前に、その約半分の高さで18世紀の柱廊玄関(A)がついている。これはドーリア式を模した4本の円柱の上に3本の大きなアーチを配したもので、この柱廊玄関の上にさらに欄干が作られている。これらの附属物の上に、さらにファサードがその上半部を現わしているわけだが、ファサードは中央のアーチのある大きな窓の両側に、石灰や溶岩からなるアラブ式の交錯アーチの浮彫模様を装飾を施している。これは後に述べるように、後陣の外側の同様の交錯アーチの浮彫装飾と呼応するものである。ファサードの上部は、中央身廊の上を覆う破風屋根の破風の部分に当るので、三角形をしてその頂点に十字架が立っている。左右身廊の上の屋根は、中央身廊上の破風屋根よりさらに低い別の屋根となっている。さらに内陣(D)と左右の方形空間(Diacònico (F) と Pròtesi (H))から後陣にかけての部分の屋根は、身廊部分の屋根とは別になっていて、数段高いところで別の破風屋根を構成している(円蓋がないのでドームになっていない)。中央身廊の破風屋根が終わった直ぐ後に最後部の屋根が聳え、その正面壁面に三つの明りとり窓が並んでいる。

正面ファサードに戻ると、ファサードの両端には、それぞれ方形の重厚な塔がある。左側の塔は未完成のままで、右側のものは完成して四層をなし各階に

両開き、片開きのアーチ窓がある。壁のあつい結晶構造からみてアラブ系と推定されるが、*la Martorana* の鐘楼の華麗さはなく、中世的な重苦しさが目立つ。柱廊玄関の中で姿をみせている正面入口 (A) は壮麗な記念門になっていて、ブロンズの両開き扉のまわりを、オジーヴ・アーチが重層的に取巻き、アーチの各部分には古典主義的な技法で、細かい唐草模様の浮彫が施してある。ブロンズ扉は *Bonanno Pisano*<sup>13)</sup> の銘があり、製作年代は 1186 年と推定される。これは旧約聖書の主要場面を 42 場に分けて浮彫にしたもので、各場面ごとに俗語(初期イタリア語)の簡単な解説がついている。浮彫そのものは鈍重な感じで極端に様式化されている。

正面ファサードの構成は以上のようなものであるが、柱廊玄関の外側には金属の柵があって、日常の出入りにはこの正面玄関は使われていない。実際に使用されているのは教会左側面の柱廊玄関 (B) である。教会の側面に入口があり、それが日常の出入りに使用されているという構造では、*Monreale* の *Duomo* は *Cattedrale di Palermo* と一対をなしている。この柱廊玄関は繊細な感じのもので、*Fazio Gagini* (1547-67)<sup>14)</sup> の手になる *Renaissance* 風のもので、*Cappella Palatina* の内庭の華麗な柱廊玄関を彷彿させる。この柱廊の下には簡素な感じの門が開いており、アーチの柱頭幕間にモザイク装飾が施されている。また両開きのブロンズ扉は、これもまた 28 枚の聖人像の浮彫の彫刻が施してある。この方は、*Barisano da Trani*<sup>15)</sup> の手になるもので (1179 年)、その作風にビザンツの影響が強いと言われるこの人の聖人像は、いずれも椅子に坐った半身像で端正な顔だちに愛嬌があり一種の温みのある作品である。

一方、教会の裏側に廻って後陣の三つの凹所の外壁をみる(後陣の外壁の背後には、密集した民家が迫っているが、街並みはすぐに切れて樹林に変わる)と、ここには独特の装飾が施されているのが見える。それは、外壁に全面的に施された石灰岩の壁の上に、一面にくり広げられた茶色の溶岩からなるアラブ式の交錯アーチ装飾、同じくイスラム建築特有の幾何学模様を描いた円盤状装飾、同様に幾何学模様の絵様帯などである。これは、*Norman* 建築の中でも、*Monreale* の *Duomo* と *Cattedrale di Palermo* 以外には見られないもので、この建築のアラブ的要素の際立った特徴といえることができる。(似たような構造をもつ、*Cefalù* の *Cattedrale* の同じ部分はずっと簡素で共通性がない。)このことから、12 世紀の最後の四半世紀において、このような独特なアラブ式装飾壁を *Sicilia* において流行せしめる何らかの要因が、*Sicilia* 王国の内部か国外(たとえば北アフリカ)などに存在したのではないかと、推測できよう。

以上で外部構造を終って<sup>16)</sup>、再び内部に戻る。

身廊は左右9本ずつの円柱によって3身廊にわけられる。円柱は柱身は古典的伝統に立ち簡素で、右側の最初のものが緑雲石であるのを除いては、残りは全部花崗岩である。柱頭は、これも古典的で精妙な美しい彫刻が施してあり、古代ギリシヤ以来の伝統のある「宝角」<sup>17)</sup> (lat. class. *cornu copiae*. it. *cornucopia*) の装飾と、これもヘレニズム以来の伝統を誇る *clipeus*<sup>18)</sup> (円盤の中から突出している形態の神々や英雄の像) が、柱頭の上部に並び、下部にはこれも古典的伝統に立つアカンサスの葉飾りの浮彫などがある、古代の伝統の根強さを物語っている。また柱頭とアーチ基底部分との接続部には、ビザンツ建築に特に多いと言われる逆ピラミッド形の台座である *pulvinus*<sup>19)</sup> があり、そこにはアラブ式の抽象的な図柄の装飾が施してある。それらの円柱に支えられたアーチは、アラブ式の尖アーチで、アーチの先端部から真上に延長線をのばすと、アーチ上壁のさらに上部にある欄間の部分の壁面において、ちょうどその延長線の位置において明りとり窓が一つずつ開く構造になっている。さらにその延長線を天井まで延ばすと、ちょうどその点で天井の梁が横たわる位置になって来る。ドームがないので、中央身廊のアーチは、左右の列柱間のものしかなく、左右をさしわたすアーチはなく、代りに天井を左右に結ぶ梁があるだけである。そして梁の上方に、破風屋根が太い棟木を中心に広がっているのが見える。内陣から後陣にかけての幾層ものアーチも完全な左右相称になっているので、この建物の内部は正面からみると簡素な上に美事なシンメトリーをなしていることがわかる。

また身廊の床は、斑岩や花崗岩からなる円形のモザイク装飾、折れ線が様々に交錯してできる抽象模様の大石装飾などが一面に施されているが、これは16世紀に完成したもので、原形を保っている。ただ、天井の梁とその装飾(抽象模様)は1811年の火事で焼けたものを復旧したものである。

次に内陣(D)に移る。内陣は前後左右をそれぞれやや短い角柱の上に載った雄大なアラブ式尖アーチに囲まれている。その柱から上のアーチ内壁、柱頭幕間には一面にモザイク壁画が施されている。この内陣の空間が同種の他の建築のそれに比べて、ひどく広く感じられるのは、この建物では中央身廊の幅が普通よりも広くとってあり、側廊の幅の3倍の大きさにも達しているからである。中央身廊や内陣が極端に広いこの構造と、先に述べたシンメトリーの構造とが、この建物の中心として後陣壁龕に視線を収斂せしめる効果を与えている。この建物のどの場所においても、後陣壁龕の最上段にある *Pantocratore* の視線

を感じるといわれるのもそのためである。アーチのうちで最初のもの(中央身廊と内陣の境界にあるもの)が最も大きく、ほとんど梁に達するまでになっているのは、このパースペクティブを固定するためである。このようにして、額縁の中に次々と小さな額縁を嵌め込んだように、内陣の裏側のアーチ、後陣の祭壇両脇のアーチ、後陣の壁龕両脇のアーチと、合計4本のアーチが整然と組み込まれていく。

内陣は通例のように身廊より一段高くなっていて、身廊との間にモザイク装飾のある低い仕切柵がある。しかし、これは、原物ではなくて18世紀の模造である。また内陣は聖歌隊席でもあるためパイプ・オルガンが置かれ、内陣の左側の部屋(H)との境界(アーチの下)を大部分塞いでいるが、最近さらに(H)と(D)の境界を木の仕切で塞いだので、視界的効果を著しく弱める結果となった。また内陣の天井は集中式プランのようにドームがあるのではなく、破風屋根になっている。しかしこの天井の部分に、人々は豊かな鐘乳石状下垂装飾を施した。(但し、1811年の大火で焼失し修復したもの)。この点に、Cappella Palatina との類似を見ることも出来よう。(なお内陣の後のアーチの左右の柱の許に、王座と大司教座とがある。)

次に内陣右側の部屋(F)(Diaconico)には、Guglielmo I世(1166年死去)とGuglielmo II世(1189年死去)の柩がある。前者は斑岩の石棺でもとは天蓋があった。後者は大理石製で16世紀の作品である。これに対して反対側の左側の部屋(H)(Pròtesi)には、左側壁面を背にGuglielmo I世の妻と息子たち、Margherita di NavarraとRuggero及びEnricoの遺体を納めた大理石の墓(18世紀に修理)がある。さらにここでもう一つ有名なのは、ここには上述の墳墓に並んで、Saint Louis(Louis IX世。1214-70)の祭壇と、王の内臓と心臓が保存されていると称する大理石の棺とが設けられていることである。聖王ルイは1270年第8回十字軍を起し、Tunisに向って出帆し到着直前ペストに罹患し8月25日に亡くなった。遺体は病菌の伝染に恐れ、煮沸し遺骨だけを本国にかえしたが、鍋に残った肉片を集め、帰国の途次に葬ったのがこの聖遺物であるという。

その他の部分について述べると、左右側廊の床の装飾は中央身廊の延長で同じ種類の幾何学模様、またその側壁の装飾も下半分は大體身廊の円柱と同じ高さまで純白の大理石の鏡板で所々に幾何学模様の縞が等間隔に縦に入っているだけである。この点は後陣の祭壇の後の壁龕の鏡板の部分も同様である。側廊の側壁の上半分は一面にモザイク模様が施してあるが、等間隔に窓が開いてい

るので壁面の面積はそれほど広くないであろう。側廊にはこの中段(鏡板の上)の壁面の上にさらに上段の壁面があり、モザイクで飾られている。総じてこの建物では、壁面の下半分は簡素で飾り気がなく色彩も淡白で、上半分の金色燦然たる壁面と著しい対照をなす点に特色がある。

その他に、(G)は16世紀の建物で、聖 *Benedictus* を祀る *Cappella di San Benedetto* で、全室大理石の寄木細工と浮彫、また祭壇には高浮彫の彫刻などがある。(I)は *Cappella del Crucifisso* (17世紀)。(L)は宝物庫。(M)の部分の階段を登って *Duomo* のテラスに上ると、*Conca d'Oro* の溪谷を見おろす眺望を楽しむこともできる。

ほぼ同時代の *Firenze* の *S. Miniato*, *Roma* の *Basilica di S. Maria in Domenica* や *Capua* の *Sant'Angelo in Formis* など本土系のロマネスク系 *Basilica* 建築と比較すれば明らかなように、この建物は *Basilica* としての基本構造は酷似しているが、内陣を中心とするビザンツ式構造(後陣やアーチの組み合わせも含め)を組み入れた点が全く独自の点なのである。最も類縁性があるのは、内陣と後陣の構造に多少のちがいはあるが、*Cefalù* の *Cattedrale* であろう。

次にモザイク壁画の配置は次のようになる。*Monreale* の場合、*Cappella Palatina* や *Martorana* の場合とちがってドームがないので、最も尊厳な部分は中央後陣壁龕で、モザイクもその部分から始まる。そしてモザイクの配置は、この形式の建築なりにビザンツの規範に基づいている。この点は同じ構造をもつ *Cefalù* の *Cattedrale* も同様である。その配置の順序は次のようなものである。(なおこの建物のモザイク装飾面積は  $6340\text{m}^2$ )。

1. 中央後陣壁龕。 2. 中央身廊右側から正面ファサードの内壁を経て中央身廊左側壁まで(旧約聖書、新約聖書の説話)。 3. 内陣アーチ上壁から右側廊壁面をへて左側廊壁面にまわり、次に内陣左側の *Pròtesi*, 同右側の *Diaconico* (以上はキリストの生涯における各場面)。 4. 左右後陣。

これをさらに詳細に述べると次のような構成になる。

1. 中央後陣壁龕(この部分は、辺縁にそれを囲むアーチと角柱部分をもつ。さらにもう一つ外側に、壁龕全体を包む一まわり大きなアーチと角柱がある。)

最上段: 両手を上げ祝福を与える *Pantocratore* の巨大な半身像。左

手に開いた本をもつ。像の下にギリシヤ語で *Pantocratore* の銘あり。辺縁のアーチ：円環装飾に取り巻かれた9人の使徒の像。外側アーチ拱腹面：下方左右に2人ずつの大天使、上方は飛翔する天使像。

同中段：王座に坐す聖母マリアとキリスト(中央。マリアの頭部に近く *Panagia* の銘あり)。両脇に侍立する天使各1、使徒各2。辺縁のアーチ角柱：使徒左右に各1。外側アーチ角柱の内壁：使徒左右に各3。

同下段(中央は明り取り窓)：左右3人ずつ聖人像。辺縁アーチの角柱：左右一人ずつ聖人像。外側アーチ拱腹面の角柱：左右各3人の聖人。

後陣外側アーチ柱頭幕間：左右に大天使各1。同角柱中段：使徒の半身像。同下段：アラブ式樹木図案。

## 2. 中央身廊。

円柱が左右9本あるのでアーチの柱頭幕間は入口側の一個所を除くと左右各9個所。それにファサード内側の壁面が加わる。しかし、柱頭幕間の上段にまた壁面があり、ここは左右各9個の窓が開き、窓の間隔が左右各9個ある。花模様のモザイク装飾帯の中に円環に囲まれた天使の胸像が続く。天使はいずれも表情に富む。中央身廊のモザイク壁画は1190年過ぎに完成し、輪郭が明確で色調や濃淡が精密であると言われる。

旧約聖書の主要場面をとったこのモザイク壁画は、右側上部壁面から創世紀の場面(第一景は、「水面に漂う神の靈魂」)で始まる。上部壁面が終ると、そのまま正面ファサード内壁に移り、そこから左側上部壁面に移り、そこが終って一巡すると、右側柱頭幕間から二巡目が始まり左側柱頭幕間の順で終る。壁画の配置は、ギリシヤ正教の規範カノンに則っているので、*Cappella Palatina* の同じ部分と似た配列だが壁面が広いので余裕があり、一つの説話が多数の小場面に分れることがある。主要なテーマは次のようになる。――

光の創造、天空の創造、水と陸の分離と植物の創造、星辰の創造、魚と鳥の創造、動物とアダムの創造、神の休息、善悪の木、エヴァの創造、原罪の場面、永遠の墮罪、天国を追われるアダムとエヴァ、アダムの労苦、カインとアベルの犠牲の物語、大洪水の物語(ここから右側柱頭幕間に戻る)、箱舟から降るノア、パベルの塔、3人の天使とアブラハム、イサクの犠牲、駱駝に水を与えるレベッカ、レベッカのアブラハムの使者との出発、ヤコブの夢、エザウと狩猟、ヤコブと天使との争い(この画が左側柱頭幕間の最前部に来る)。

これらのうち、創世紀の部分(特に昼と夜の創造など)の劇的な表現と物語としての表現意欲は、Venezia の San Marco 寺院の *Domenica delle Palme* や *Christo nell'Orto* のモザイクと共通するものがある。とくに「原罪の場面」のエヴァの解剖学的にも正確でエロチックな女体や顔の表情の表現には、既にビザンツの規範を越えようとする表現の衝動が窺われる。最終場面の「ヤコブと天使との争い」の場も、二人の人物の躍動性と背景の奈落の空間の奥行き表現に、既にロマネスク芸術の三次元への指向が指摘されている。

なお、中央身廊正面のアーチ柱頭幕間は左右一対の大天使像、また列柱にかかるアーチの拱腹面は円環の中に聖人像が画かれている。

### 3. 側廊および内陣左右の空間。

ここに描かれているのは新約聖書のキリストの生涯の挿話の主要場面で、その配置は内陣の左右アーチ柱頭幕間から始まり、右側廊を経て左側廊に移り、次いで内陣の左空間 (Pròtesi) と右側空間 (F) (Diacònico) の壁面で終るものである。(側廊の場合は壁面に規則的に窓があき、その間隔に画が来る。またアーチ柱頭幕間にも描かれる)。その主要テーマは、——生誕、ヨゼフの夢とエジプト行き、洗礼、変容、ラザロの復活、エルサレム入城、磔刑などである。このうち、右側廊の最後から二番目の「水腫病者の治癒」、「癩者の治癒」、Pròtesi の「エレサレムへの入城」などの壁画は、そのリアリズムで有名であり、やはり San Marco 寺院のモザイクとの親近性が指摘されている。なお「キリストの生誕」の場面は、内陣の左右アーチ柱頭幕間である。

### 4. 後陣。

右後陣壁龕： ペテロの像。右後陣右側壁面： ペテロ伝(牢獄の聖ペテロ、聖ペテロ足萎え人を治す、聖ペテロ、タビタを蘇えらすなど)

左後陣壁龕： パウロ像。左後陣左側壁面： パウロ像(パウロの洗礼、聖パウロの布教とダマスカス脱出など)。

### 5. 内陣： アーチの柱頭幕間については既に述べたが、このうち正面奥のそれは、6人の天使と左右にアラブ風の樹木のモザイクが画かれている。

またこのアーチを支える角柱の最下部(拱腹面の下部)にはこの教会の縁起を物語る重要な壁画がある。即ち、左側の王座の上に、「キリストにより加冠される Guglielmo II 世」、右側の大司教座の上に「聖母マリアに寺院を寄進する Guglielmo II 世」のモザイク壁画とである。



6. (b) Chioostro di Convento Benedettino di Monreale<sup>20)</sup>

この修道院回廊は、教会本体と同じく Guglielmo II 世の命により、教会と殆んど同じ年代に建てられた。即ち、1174 年から数年内と推定される。構造はこれもまた完全にシンメトリーをなして縦横 47 m × 47 m の方形で、南の角だけに噴水と泉亭がある。これも、回廊と相似形をなす小正方形である。回廊の西北側は教会の右外壁と境を接し、反対側(東南側)は古いベネディクト修道院の外壁と接している。この修道院は既に建物は壊されて、残っているのは身廊を区分していた二列角柱の一部と外壁だけである。回廊と接するこの外壁は非常に高く、回廊の屋根を越えて遙かに聳え、教会の後陣の裏側の壁面と同じ、交錯形の盲アーチを示している。西南に接するのが新しい修道院で、その庭の一部に Oreto 溪谷と Palermo を見渡せる見晴し台がある。

回廊の内庭は、左右、前後の回廊の中央をそれぞれ結ぶ路があって、ちょうどその二本の道が中央で交錯する。中央は円形の芝生になり樹木が植えてある。その周りを道路がロータリー式に回遊する。二本の道路により区切られた庭園の四つの部分も完全にシンメトリーで芝生の上に植えられた樹木や植物も相称である。泉亭は中央にはない。

この回廊について最大の特徴は、それを取巻く円柱群とその柱頭の装飾である。それは当時のロマネスク時代において地中海世界に存在したあらゆる芸術様式の粹を集約したものと言えよう。円柱は殆んど二本一組で 228 本あると言われる。(泉亭の部分も含む。円柱は 4 本一組のものもあり、二本が真直ぐ立たず X 字型に交錯しているものもある)。柱頭の装飾のモチーフは、一組ずつちがい重り合うものは全くないと言われる。アーチがアラブ式で尾部の垂下が激しいので、柱身はその部だけ短小気味である。柱身そのものは古典的であるが、アーチは完全にイスラム的で、二重の尖アーチで、その二重の楕輪の境界にある細い浮彫の区分線や、熔岩からなる外披の幾何学模様様の装飾には渋い味わいがある。またこのアーチの特色としてすべてのアーチの拱腹面に大きな太い割形がついている。これが何を意味するかについては未だ定説がない。柱身の装飾は多彩であるが大きく分類すると *cosmatesca*<sup>21)</sup> と呼ばれる多色で彩色度の強いモザイクの嵌込み細工か、全くの無装飾か、これも多色のアラベスク模様かのいずれかで、最後のものはその鮮明な彩色にイスラム的伝統がよく現われている。柱頭とアーチ基部との境界には冠板が入れているが、そこに碑銘や彫刻家の銘がよく刻まれている。柱頭の装飾は千差万別でこの回廊の最大の見所と言えよう。装飾のモチーフは多くは聖書の人物や情景であるが俗界のも

のも多い。それらの中で特に有名なものは左側回廊 18 番目の柱頭で、そこには、

Ego romanus filius Constantinus marmurarius.

(余はローマ人にして、石工コンスタンティヌスの息なり)

という銘があって、ローマを始め本土のロマネスクの影響力の強さを物語る証拠とされている。また右側回廊 19 番柱頭は、「聖母マリアに教会堂を奉献する Guglielmo II 世」という銘があり、二本の柱頭の両方にわたってその情景が彫られている。その他にも、ビザンツ風の透彫り装飾の中から飛び出している Campania 化した古典的な *cariatido*, Province 地方の修道院回廊の柱頭に多い大勢の人物像の犇きあった柱頭装飾、Lombardia 風の重厚さとアラブ=ビザンツの繊細な東方の様式、ゴシックの予兆の感じられる風変りな葉飾りなど当時の地中海世界のあらゆる芸術様式の典型とその混合様式がみられる他、冠板を支える首の長い孔雀の群、重圧に押し潰されそうになり反りかえって冠板を支えている *Atlas* や獅子の群像など奇怪な幻想的なものまでがみられる。この回廊の柱頭装飾は、様々な芸術様式の影響を敏感に感受して、しかも変化の速かった *siculo-norman* 芸術の中でもとりわけ混淆の度合の激しいものであろう。そこには当時の地中海域の芸術様式のあらゆる可能な組合せがある。そしてそれらを産み出す想像力には爆発的なものがある。これは「東西の融合」を標榜した Norman 諸王の理想の究極の達成であり、迫り来る政治的破局を目前にしての「地中海王国」の総決算であった。この激しい混淆の中に見られる想像力の奔放さともはやビザンツの規範に縛られぬ自由な精神のうちに、やがて新しい時代の精神に通じる志向を感じる事が出来よう。それはロマネスク時代の全地中海域の芸術の諸傾向を統合して、やがて Renaissance において結実すべきものであった。

Norman 王朝最後の時期の混沌とした芸術的混淆の精神状況を、円柱柱頭において見たわけであるが、同じ事情が回廊の構造そのものにも見られる。この構造は、円柱や柱頭装飾と同様、基本的には本土の古典主義的傾向のロマネスクの影響を強く受けており、ローマの San Paolo fuori le mura 教会の僧院回廊とよく似ているといわれる。しかし相異点も多く、簡素な San Paolo では柱頭装飾も、柱身のアラベスクやモザイクもなく、アーチもアラブ式でなく、アーチ上壁の重厚な石組みも浮彫もなく、同じ個所に代りにあるのは *cosmatesca* 様式の大理石の寄木細工の装飾だけである。結局のところ二つに共通

するものは、内庭を取巻く回廊の構造と2本が一对の列柱の形だけであるといえよう。さらにこの二つを決定的に分別するのは、Monrealeの回廊南隅にある泉亭の存在と、回廊全体の雰囲気である。ここには、黒い水盤の中から一直線に伸びた黒大理石の円柱があり、その柱頭部にある細かい獅子の彫刻の口から蒸溜するかのようには水を絶えず水盤に注いでいる。噴水を囲む泉亭の構造は屋根も壁面もアーチも、アーチや柱頭の装飾も、回廊の縮図である。泉亭が内庭の中心にはなく、また内庭の四周から中心部に集って来る水路はないが、この内庭はやはり、まがうことなくGranadaのAlhambra宮殿のPatio de los leonesのもつ、イスラム教の形而上的な「地上の楽園」としての意義をもち、泉亭もその生命の川としての象徴的意味を表わしているであろう。それ故に、Zisaと並んでSiciliaで最も異国的な雰囲気の漂うこの僧院の内庭は、南国的な草花の芳香や泉水のしのびやかな音のする静寂のうちに、Norman諸王の「東と西の融合」の夢を静かに紡いでいると言えるであろう。

SiciliaのNorman建築のモザイクの歴史は、第I期がRuggero II世(1130-54)の治世に当り、Cappella Palatinaの(A)部分、La Martorana, Duomo di Cefalùがこれに属する。第II期に属するのは、Cappella Palatinaの(B)の部分で、Guglielmo I世(1154-66)の治世に当る。第III期がGuglielmo II世(1166-89)の治世で、Cappella Palatinaの(C)部分、La Zisa, Sala di Re Ruggeroがこれに属する。最後の第IV期はMonrealeのDuomoがこれに属し12世紀末から13世紀前半の時期である。(建築の年代とモザイク作製年代は多少ずれる)。第I期と第IV期の間には半世紀以上の時差がある。第I期の作品が第II期黄金時代のビザンツ中心地域の建築、とりわけAtticaのΔαφνί寺院のものとの関連性があり、ビザンツの工匠を招いて作成させただけに正統的で図像的象徴的な規範をよく守っていること、第II期の作品ではこの規範からの逸脱が見られ、図像的であるより図案的で叙述的であり、しかも抽象的ではなく個性的感覚がみられること、そしてこの起源については諸説あり、Siciliaの工匠がCampaniaを中心とする西欧化の傾向に影響を受けたとする説、あるいは西欧でも、12世紀のビザンツ正統芸術でも、Sicilia独自の様式でもなく、ビザンツの辺境に当時流行して後に消滅した静的・装飾的の様式の影響を受けたもので、Sicilia芸術の自立が達成されたものではないとする説などがあること、第III期の作品では第II期の個性的傾向は消滅し再び図像的、様式的傾向が現われること、しかし第I期の場合とちがってビザンツ中央

でなく地方の影響が主流であるため客観主義の基調のもとに雑多な要素と規範<sup>カノン</sup>を逸脱する自然主義的傾向が見られること、などの諸点は既に Cappella Palatina の項で指摘した。

第 IV 期の Monreale の場合は、これらの I~III 期の場合とは、その傾向が質的にちがう。それはこの時期には、Sicilia の芸術の上にも、ロマネスクの影響を濃厚に受けた、Venezia を中心とするイタリア本土の影響がはっきりと現われて来るからである。従って Siculo-norman 芸術も単にイスラムやビザンツ圏との関係のみ見ているだけでは十分解明することはできない。Monreale のモザイク壁画に対する Venezia 派の影響については、次に稿を改めて考察を試みる予定である。

(この稿未完。続稿：チシーリアにおけるゲート その四)

(略号は文献の項目に示してある)

<sup>1)</sup> Martorana (S. Maria dell'Ammiraglio) については次の資料と図版(写真)を使用した。TCI: *Sicilia*. p. 128-130. SAN・SAI. P. 280-283. MON・SAI. p. 370. 写真については次のものがある。MON・SAI. p. 371. (教会中央身廊から内陣 C, D を見る)。SON・SAI. p. 282. 図版 No. 283. (Piazza Bellini から鐘楼 A を見る)。LUI. vol. XIV. Tav. 93. (教会円蓋部モザイクの全体像。下方からの撮影。色彩)。AVI: *Sicilia*. p. 38. No. 31. (鐘楼全景)。同、No. 32. (教会身廊の 6 本の柱と迫持)。同、No. 33. (中央身廊アーチ壁モザイク「マリアの昇天」)。同、p. 39. No. 34. (円蓋部モザイクの全体像)。Visioni. No. IV-3. (Piazza Bellini から鐘楼と、接続部分のバロック式ファサードを見る)。UTET. AI. p. 163 (No. 229). (円蓋部モザイク全体像)。同、p. 164 (No. 230) (鐘楼全景)。同、(No. 231)。 (接続部モザイク壁画。「キリストにより加冠される Ruggero 王。E)。

<sup>2)</sup> Giorgio di Antiochia (Γεώργιος Ἀντιοχείας)。Ruggero II 世はシチーリア王国建国にり、有能な人材当をひろく国外にも求め、登用したが、その代表的な一人。ビザンツ出身の海軍提督。最初アラブに仕え(アラブ名 Emir al Bahr) 次で Ruggero II 世に仕えて戦功あり。1135-53 年、アフリカ北岸の回教地区を制圧。1147 年、ギリシャ本土のコリントス、テーバイ両市の奇襲攻撃を指揮。Palermo では、上記建築の他、Ponte dell'Ammiraglio の架橋で知られている。

<sup>3)</sup> La Zisa については次の資料を使用した。TCI: *Sicilia*. p. 175-76. MON・SAI. p. 372-74. 写真については次のものがある。MON・SAI. p. 373. No. 432. (建物正面の左手前からの全景)。LUI. vol. XV. Tav. 239. (建物斜後方からの俯瞰図)。AVI: *Sicilia*. p. 28. No. 15. (Esedra 内部。鐘乳石様下垂装飾のついた壁龕と噴水)。

<sup>4)</sup> esedra (exedra, ἑξέδρα) については、*Enciclopedia dell'Arte Antica. Classica e Oriente*. vol. 3. p. 436-39. esedra の項参照。なお esedra は上記の個人住宅の他にも、公共建築にも多く採りいれられており、この場合は壁面に固定された石や大理石の長い

ベンチが設けられ、対話や政治的集会などの公的機能をもった設備であったと考えられる。ペルガモン、デーロスなどの競技場のものが有名。Palermo では Villa Giulia alla Marina の庭園の中心に、対角線状の遊歩道の交差点に、4 個集っている esedra がある。これはポンペイのそれを模した Neo-classic の建物で、Goethe は当然よく見ている筈である。

5) Alhambra の Patio de los Leones については、Titus Burckhardt: *La civilización hispano-árabe*. Capítulo 13, Granada. p. 221-261 参照。

6) コーランにでて来る「天国」の意味の語はアラビア語で al-yanna であるが、これは「庭園」と「隠れた場所」の二つの意味を内包する。

7) H. I. R. s. 265-6.

8) Goethe が東地中海域や中近東への関心を深める契機となったと思われる事件や人物との遭遇で主なるものは次の通りである。

1. 1787年1月 Roma で、オーストリアの王族で将軍の Christian August von Waldeck (1744-98) と知りあう。卿はギリシヤに関心深く、Goethe をギリシヤ旅行に誘ったが実現しなかった。

2. 1787年3月16日、Napoli 駐在イギリス公使 Sir William Hamilton (1730-1803) を Riviera di Chiaia の家に訪ねる。ギリシヤやシチーリアの古代遺跡に造詣深く、後に *Collection of Engravings from Ancient Vases of Workmanship discovered in Sepulchres in the Kingdom of the two Sicilies (1791-95)* を出版した人物で、Goethe はそのシチーリア出土の壺のコレクションを見る機会をもった。

3. 1787年5月28日、Napoli (二次) で Cornelius de Pauw (1739-99) の *Recherches sur les Grecs* (1787, Berlin) を読む。

4. 1787年7月22日、Roma (二次) で *Histoire de l'art par les monuments depuis sa décadence au IV siècle jusqu'à son renouvellement au XVI siècle (1810-23)* の著者 Jean Baptiste Louis George Sérour d'Agincourt と知り合う。この芸術史家はビザンツ芸術と西欧中世芸術の関連を研究テーマとしていた。

5. 1787年5月17日 Roma (二次) で英国人古美術商 Thomas Jenkins (1722-98) と知り合う。彼は Roma に本拠をもつ他、Castel Gandolfo に豪壮な別邸を構えていた。

6. 1787年8月23日、Roma (二次) で、ギリシヤ、エジプト方面を旅行 (1781-87) し資料を蒐集して帰途ローマに寄った英国人考古学者 Sir Richard Worthley と知り合う。Goethe はこの時初めて、パルテノン神像の彫刻をそのスケッチによって知った。卿は後に *Museum Worthleyanum* (London, 1824) (二巻本) を出版する。

7. 1787年9月、Roma (二次) で、エジプト、シリア、トルコ、ギリシヤの旅から帰国途中の仏人建築家 Louis François Cassas (1756-1827) の古代遺跡の建築や遺品の精密なスケッチ、水彩画などをみる。この時の画集は10点からなり、Constantinople 市街と Hagia Sophia, シリアの古代都市 Palmyra (II *ἄλμυρα*) の遺跡、同じくシリアの Baalbeck の Heliopolis 遺跡、エレサレムの回教寺院、フェニキアの小寺院、レパノンの山岳風景、トルコの墳墓跡、エジプトのピラミッドとスフィンクスとオベリスクなど

である。この人は後に、*Voyage pittoresque de la Syrie, de la Phénicie usf* (1799, Paris) を出版した。

<sup>9)</sup> S. Cataldo については次の資料を使用した。TCI: *Sicilia*. P. 128. SAN・SAI. P. 280-83. MON・SAI. p. 370. 写真については次のものがある。TCI: *Sicilia*. p. 40. No. 35. (内陣から列柱および三つの円蓋内部を見あげる構図)。同、No. 36. Piazza Bellini から教会側面(北面)の全景。UTET. Al. p. 165 (No. 232). (TCI: *Sicilia*. No. 35 と同じ構図)。Cp: *Sicilia*. No. 22. (La Martorana の鐘楼と S. Calaldo の遠景)。

<sup>10)</sup> Majone di Bari. Puglia 地方 Bari 出身。Ruggero II 世時代の登用人材の一人。Ruggero II 世の時代に内大臣府に入りやがて官房長となり、Guglielmo I 世時代海軍大臣となる。外交手腕あり、敵対するローマ教会と同盟(1156年 Benevento 協定)し、ビザンツと Genova とを離間するのに成功した。また神聖ローマ皇帝 Friedrich Barbarossa の南下政策には力に対抗した。しかしその権勢は宮廷内で反対勢力の反撥を呼び、かつての部下であり、婿として自分の娘との婚約を許した Norman 貴族の Matteo Bonèllo に 1160 年 11 月 10 日に殺害される。Bonèllo は秘かに Ruggero II 世の庶出の娘 Clemenza に心を寄せ、Puglia 地方の貴族と計ってクーデターを起し、Guglielmo I 世を幽閉、Puglia 侯 Ruggero を王に擁立したものである。しかし、このクーデターは最終的には失敗し、Puglia 侯 Ruggero は殺害され、Guglielmo I 世は復辟し、Bonèllo は処刑された。このクーデターの際、王宮は掠奪され被害を受けた。(LUF vol. 3. p. 358. Ibid. vol. 12. p. 594)。

またここで当時シチーリアの置かれた国際環境を説明しておくことによる。まず、1130 年の Ruggero II 世の戴冠に当っては、新興シチーリア王国の擡頭を恐れたローマ教皇は Pisa, Venezia, ビザンツ、ドイツ帝国と同盟を結び大包围網を形成して対抗して、9 年にわたる戦後の発端となった。しかし Ruggero II 世は巧みな用兵や外交手段によって敵を離間し、また多くの人材を民間や国外から登用して内政の充実をはかり、1139 年 Gagliano 川畔の戦いで教皇軍を破り、最終的に教皇にシチーリア王国の独立を公認させた。この後、Ruggero II 世は、かつて一度失敗したことがあるアフリカ北岸の遠征を提督 Giorgio d'Antiochia に命じ、シチーリアを地中海帝国の中心たらしめる年来の宿願を達成した。また 1147 年にはビザンツ領だった Corfù を占領し南イタリアに対するビザンツ帝国の領土的野心を最終的に絶った。Ruggero II 世の生涯は、建国の祖としてこれらの包围網を突破し、シチーリアの独立達成のための外征に明け暮れたが、文化的には東方志向が強く、「東西の融和」、「多様な調和」という理念が基底にあった。従って、独立達成の後には、アラブ、ビザンツ圏との接触を保ち、教皇に対しては他の勢力との離間を図りながら友好関係を保ち、ただイタリア半島の支配を図る神聖ローマ帝国(ドイツ帝国)の脅威に対しては連合してこれに対抗するという政策をとり、これが爾後シチーリア王国の基本的な外交方針となった。これは単に外交政策というよりも、当時のシチーリアの文化理念である「東方と西方の融和」のあらわれである。

Guglielmo I 世(在位 1154-66)も父王のこの基本理念を継承した。彼はさらに父王の政策を一步進めて、ビザンツ帝国、教皇、Venezia との連携を深めドイツ帝国の孤立化をすすめ、上記のように 1156 年に教皇と Benevento 協定を結び、Ruggero I 世以来の

ローマ教会との長い反目の歴史に終止符を打った。この協定に際して活躍したのが、Ruggero II 世以来の重臣である Majone di Bari であることは既に述べた。この協定の前年 1155 年にこの政策に不満をもった地方貴族が神聖ローマ皇帝 Friedrich Barbarossa の支援を期待して叛乱を起したが、Benevento 協約の締結により教皇軍が Guglielmo I 世を支援し、叛乱は鎮圧された。Matteo Bonello のクーデター (1160 年) はさらに後のものであり、第二の事件である。

Ruggero II 世、Guglielmo I 世時代の建築が、本土のロマネスク様式の回帰を示す Duomo di Cefalù を除いて、S. Giovanni degli Eremiti, Cappella Palatina, Martorana, Zisa, San Cataldo などが悉くアラブ・ビザンツの色彩が強く現われているのは、単なる偶然ではない。

北方の脅威に対するシチーリア王国の伝統的政策が転換するのは、Guglielmo II 世 (在位 1166-89) 時代である。彼は Friedrich Barbarossa の南下政策に対抗し Lombardia 同盟に加入し、教皇 Alessandro III 世を支援していたが Carsoli の戦い (1176) で皇帝軍に破れ、翌 1177 年の Venezia 平和条約で皇帝と 15 年間の休戦協定を結び、代償として姪 Costanza の、Barbarossa の息子で Hohenstaufen 家の Heinrich (のち Heinrich VI 世) との結婚を認め、のちに嗣子がなくまま王位を Costanza、次いで Heinrich (Enrico) に譲ることになり Norman 王朝終焉のきっかけを与えることになった。またビザンツ皇女との結婚が纏らず、イギリス王 Henry II 世の娘を娶ったこと (1177 年) も、彼の西欧傾斜への契機となった。この前後からシチーリアの西欧接近は決定的となり、回教圏、ビザンツ圏との対立が鋭くなり、1175 年に Tunis, Baleari に兵を送り、1185 年にはビザンツの内紛に乗じて Durazzo と Tessaonica を占領した。また第 3 回十字軍では、西欧の軍隊の領内通過を認め、シリアに艦隊を派遣して積極的に協力した。Guglielmo II 世の死後 (1189 年)、ドイツ帝国に反感をもつ貴族に擁せられた、Guglielmo III 世が即位したが、廃され Norman 王朝は断絶し、戦乱と無政府状態の数年のうちに皇帝 Heinrich IV 世の神聖ローマ帝国領に編入された。

<sup>10</sup> Duomo di Monreale については次の資料を使用した。TCI: *Sicilia*. p. 183-85. MON・SAI. p. 371-73. p. 377-81. p. 418. Sébilleau: *La Sicile*. p. 39-43. Ch. AI. p. 79-80. 写真(図版)については次のものがある。MON・SAI. p. 373 (No. 431) (中央身廊から後陣までの全景) p. 372. (No. 430) (後陣外壁の盲道持群) Sébilleau: *La Sicile*. No. 31. (後陣外壁)。No. 39. (内壁および後陣のモザイク装飾)。AVI: *Sicilia*. p. 83. (No. 116). (Duomo, Chiostrò, Convento, Piazza の全景空中写真)。p. 84. (No. 117) (中央後陣壁龕最上段の Pantocratore 像拡大図)。 (No. 118) (中央身廊左側アーチ上壁のモザイクおよび左側身廊の一部)。p. 85. (No. 119). (中央身廊の入口方面より、内陣・後陣および中央身廊の天井を仰ぐ)。p. 86. (No. 120). (正面入口のブロンズ扉の彫刻の細部。Bonanno Pisano, 1186 年作)。 (No. 121). (中央身廊左側アーチ上壁のモザイク画「ヤコブと天使の格闘」の拡大図)。UTET. AI. p. 170 (No. 239). (正面入口から中央身廊を通じて寺院内部の全景をみる)。p. 171. (No. 241). (身廊の円柱柱頭の古典主義的彫刻の細部)。p. 172. (No. 242). (中央後陣の三層のモザイク壁画全景)。p. 173. (No. 242). (中央身廊右側上部壁の創世記説話のモザイク。「水面に漂う神の霊」、「星と夜の創造」の場

面)。(No. 243) (No. 242 のさらに上部、最上部絵様帯における、天使のモザイク像)。p. 176 (No. 248) (内陣の王座のアラブ=ビザンツ様式の透し彫欄間)。 *Visioni*: (No. 10) (Duomo の正面全景)。なお Monreale に関する最近の研究書としては、Ernst Kitzinger: *I mosaici di Monreale* (1960), Roberto Salvini: *Il Chiostro di Monreale* (1962), Wolfgang: *Il Duomo di Monreale* (1965) などがある。また Monreale の Duomo 建立の由来について最も信憑性のある記録は、1596 年に Roma で、当時 Monreale 大司教でまた枢機卿でもあった Ludovico il Torres の秘書で Giovan Luigi Lello なる人物によって出版された、*Historia della Chiesa di Monreale* という文書で、現在これの、Bologna の Forni Editore の Reprint 版 (1967) があり、研究の基礎資料になっている。

<sup>12)</sup> Ignazio Marabitti (1719-97). Palermo の彫刻家。Roma で Ferdinando della Valle に師事。上記の他、Siracusa, Termini などの Duomo の仕事をする。Goethe は気がつかなかったが、上記の噴水の他、San Martino delle Scale の Chiostro della Abbazia Benedettina の中央にある fontana di Oreto も彼の作品であり、また Palermo の Villa Giulia alla Marina の海岸寄りの道の奥にある Palermo の守護神の像のある噴水も、その作品である。Goethe はこれらを見ていることは確かだが同一人物の作品とは気づかなかった。

<sup>13)</sup> Bonanno Pisano. Pisa 出身の彫刻家。Pisa の Duomo の正面入口扉の彫刻 (1180 年。のち 1596 年に破損)、S. Ranieri の礼拝堂の正面の彫刻 (現存) などの作品がある。Vasari によれば、彼は Pisa の Duomo 建設者の一人であるという。

<sup>14)</sup> 15 世紀後半から 16 世紀全般にわたり、Genova や Sicilia を中心に活躍した建築家、彫刻家の Gagini 一族の一人。父、Antonello (1478-1536) に協力して、Cattedrale di Palermo の 75 体の立像などの他、Sicilia 各地で多数の彫刻、装飾作品を残した。

<sup>15)</sup> Barsano da Trani. 12 世紀のブロンズの鋳造家、彫刻家。Trani の Duomo (1175 年)、Ravello の Duomo (1179 年) の正面入口のブロンズ扉の作者。その作風は端正かつ幻想的であり、ビザンツの図像学のあらゆる傾向に通暁していたと言われるが、ロマネスクの影響も無視できない。(LUI. vol. II. p. 665).

<sup>16)</sup> 最近、教会の右側面 (右側廊のさらに右側で、San Benedettino の礼拝堂 (G) から右側鐘楼の手前の部分) の屋根を剝がし、真白いコンクリートの平らな屋根をつけ、鐘楼に近い部分には小ドームを築いた。古い建物の部分と違和感があるのみならず、Chiostro からの眺めを著しく損っている。

<sup>17)</sup> 宝角(305)。Zeus が父 *Kronos* に追跡され呑み込まれようとするのを乳母の *'Apá-  
ltheia* がクレタ島のイーデー山に密かに匿まい養った。この乳母はニンフであるとする説と、Zeus に乳を与えた雌山羊の化身であるとする説とがある。後に Zeus が成長してティーターン族と戦うことになった時、この山羊の毛皮を剥いで甲冑を作ったとも言われる。「宝角」の伝説は、Zeus が乳母に養育の感謝のしるしとして山羊の角を折って与え、彼女が希望する時はいつでも奇跡によってこの角に果物を充すことを約束したというものである。(Hyginus, Ovidius, Strabo など)。このことから、古代では「*'Apá-*



ἀθεα の角」は豊穡と吉兆をあらわす象徴とされ、山羊の角の中に果実を盛り、それを草や花で飾りたてた図柄は、建築や彫刻などで大地の豊穡を示す神々を表現する際に用いられた。古代ギリシヤでは *Ἀδῶγς* や *Διδώσιος*, ローマでは *Fortuna, Felicitas* などの幸福をあらわす寓意的な神々で、それぞれ多出する。

<sup>18)</sup> *clipeus*. 大理石または金属の円盤で、その中から神々や英雄または人間の半身像が身を乗り出す形になって、そのまわりを円環状の装飾が取巻いているもの。独立して円柱の台座につけて胸像の如く扱う場合も、建築などの細部に装飾として小規模の形で使用する場合もある。また絵画の場合もある。像は原則として一台につき一体。ヘレニズム時代、ローマ時代に流行した。

<sup>19)</sup> *pulvinus*. この術語は *Vitruvius* の建築書で初出するもので、台座や柱、柱頭などの上に向かって働く力と、建築やアーチの上から下に向かって働く力との、緩衝地帯としての建築要素として規定されている。東方起源と推定され、古代エジプト建築に最初に現われ、ギリシヤ建築ではみられないがローマ建築で再び現われている。最も典型的なのが原始キリスト教およびビザンツの建築であって、そこで *pulvinus* は底面が正方形の逆ピラミッド形をした角錐台の形をしていて、上からかかる力を柱頭の中心に集中し、彫刻やその他の装飾で脆くなりやすい柱頭の末端部にかかる力を分散する機能をもっているとされる。ロマネスクでもこれは継承されたが、屢々 *abacus* (円柱の上に載せる冠板) と混同された。Renaissance でこれを最も正統的に継承したのは Brunelleschi であると言われている。

<sup>20)</sup> *Chiostro di Convento Benedettino di Monreale* の写真(図版)については次のものがある。*Visioni*. (No. XI) (噴水全景。カラー)。UTET. AI. p. 174 (No. 245) (噴水全景。東南方向より回廊をみる)。p. 175 (No. 246 上) (回廊円柱第 19 号の柱頭。「聖母マリアに教会堂を奉獻する Guglielmo II 世」)。p. 175 (No. 246 下) (回廊円柱柱頭。アカンサスの葉飾をもつ)。AVI: *Sicilia*. p. 87 (No. 122) (噴水を取巻く泉亭の円柱、アーチ群の拡大図)。p. 88 (No. 123. 円柱柱頭、Lorraine 形十字をもつ女性像)。p. 88 (No. 124. 同、受胎告知の彫刻)。(No. 125. 同 *cariatido* のある柱頭)。(No. 126. 噴水および泉亭の外壁全景。回廊内部の庭園から撮る)。Sébilléau: *La Sicile*. (No. 32) (回廊の西角より東側をみる。回廊内部および内庭)。(No. 34-36. 各種柱頭)。(No. 37. 回廊東角より西方をみる。西側回廊のアーチ全景と教会の右側鐘楼)。(No. 40. 泉亭内部。噴水の石柱と水盤)。

<sup>21)</sup> *Cosmatesca* 様式。ローマを中心に 12 世紀から 14 世紀にかけ流行した大理石装飾の様式。この流派の石工たちを *Cosmati* と呼ぶが、これはその宗家の *Cosma* 一族の家名に由来する。古代以来の伝統的な大理石寄木細工の技法に、*Sicilia* や *Campania* に伝わるビザンツの技法を加味して完成したもので、色大理石の粉末に金またはガラス細片を練り合わせ固めたものを、地の大理石に嵌め込む。図柄は幾何学模様が多く、色彩鮮やかで光沢あり、甚しく華麗。ローマの *San Lorenzo fuori le Mura* の床モザイク、同じく *San Paolo fuori le Mura* の僧院回廊のアーチ上壁装飾が代表的。(LUI. vol. V. p. 535)

## 文 献

1. J. W. v Goethe: Goethes Werke in 14 Bd, Band 11. Italienische Reise. Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1959. (略称 H.I.R.)
2. J. W. v Goethe: Goethes Briefe in 4 Bd. Band 2. Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1962. (略称 H.Br)
3. J. W. v Goethe: Tagebuch der Italienischen Reise 1986. Insel Taschenbuch 176. Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1976. (略称 ITV.Tb)
4. René Michéa: Le Voyage en Italie de Goethe, Histoire Littéraire. Aubier, Editions Montaigne, Paris, 1945 (略称 *Voyage*)
5. Touring Club Italiano: Guida d'Italia, Sicilia, Milano, 1968, 5 Edizione (略称 TCI: *Sicilia*)
6. Giuseppe Mazzariol / Terisio Pignatti: Storia dell'Arte Italiana. vol 1. Arnoldo Mondadori, 1961. (略称 MON.SAI)
7. Giulio Carlo Argan: Storia dell'Arte Italiana. vol 1. G. C. Sansoni, Firenze, 1972. (略称 SAN.SAI)
8. André Chastel: Italian Art, translated by Peter and Linda Murry, Faber and Faber, London, 1963. (略称 Ch.AI)
9. Anna Bovero: Immagini dell'Arte Italiana attraverso i secoli. vol 2. Unione Tipografico-Editrice Torinese, 1964. (略称 UTET. AI)
10. Touring Club Italiano: Sicilia, attraverso l'Italia, Nuova Serie. Milano, 1961 (略称 AVI: *Sicilia*)
11. Luigi Bernabò Brea: Musei e Monumenti in Sicilia, Istituto Geografico de Agostino, Novara, 1958.
12. Pierre Sébilleau: *La Sicile*. Editions Arthaud, Grenoble. 1966 (Traduzione italiana di Fiorenzo De Sanits. Cappelli editore, Bologna. 1968)
13. E. P. T di Palermo: Visioni di Palermo. Istituto Geografico de Agostino, Novara, 1956. (略称: *Visioni*)
14. Titus Burckhardt: *Die maurische Kunst in Spanien*. Verlag Georg D. W. Callway, München. 1970 (Versión española de Rosa Kuhne Brabant: *La civilización hispano-árabe*. Alianza Editorial, S. A. Madrid. 1977)
15. Aldo Ferrabino: *Enciclopedia dell'Arte Antica. Classica e Orientale*. Volume 1-7. Supplemento e Atlante. Istituto della Enciclopedia Italiana, Roma. 1970.
16. Aldo Ferrabino (ed): *Lessico Universale Italiano in 25 vol.* 1970-80, Istituto della Enciclopedia Italiana, Roma. (略称 LUI)
17. Michael Rogers: *The Spread of Islam*. Elsevier-Phaidon. Oxford. 1976.
18. Antoine Bon: *Byzantium*. Translated from the French by James Hogarth. Nagel Publishers. Genève. 1972.
19. Peter Meyer: *Europäische Kunstgeschichte*. 2 Bdn. Verlag C. H. Beck, München. 1978.
20. G. Agnello: *L'architettura bizantina in Sicilia*, Firenze. 1952.
21. F. di Pietro: *I mosaici siciliani nell'età normanna*, Palermo. 1946.

上記文献のうち、9-13の8冊は、イタリア文化会館、ISTITUTO ITALIANO DI CULTURA DI TOKYO 附属図書館の蔵書である。貴重な資料を提供して頂いたことに心から感謝申上げる。

#### 図 版 出 典

La Martorana (S. Maria dell'Ammiraglio): TCI. *Sicilia*, p. 129.

Palazzo della Zisa: MON. SAI, p. 373.

Alhambra. Patio de los Leones: *La civilización hispanoárabe*. p. 251.

Monreale. Il Duomo e Chiostro di Convento Benedettino: TCI. *Sicilia*, p. 184.